

〔江戸砂子^二〕花方渡 竹町所^〇本のわたしをいふ

〔紫の一本^下〕竹町渡

駒がたの渡しとも、本所の渡しともいふ、

〔御府内備考^{十三}〕竹町渡

材木町^〇渡より本所竹町への船渡なり、此渡は古く始りしにや、正保改定の武藏國圖、當所と覺

しき處、舟渡九十二間と注せり、江戸志等の書には、花方の渡とあり、その名付しゆへを詳にせず、

又業平渡とも書り、こは對岸中の郷に業平塚あるゆへの呼名ならん、此渡船請負は、山城屋次右

衛門と稱し、本所竹町に住居す、

〔大和名所記^上〕こゝにあさくさ川のきしをか、げ、だうをたて、あり、こまかけだうといへり、ま

つち山、いほさき、こまかけ、皆名所なり、本たいは馬頭觀音なり、むかし此あさくさ川のわたし守

追手の風に帆をかけてはしる、船中より此だうをみれば、だうのかけるやうに見ゆる、さるによ

つて、うまかけだうと名付と有、あさくさくわんをんへ、さんけいのかへりさ、あしをやすめんた

めに、この所よりふねにのりて、江戸橋そのほか方々へ舟付、

〔燕石雜志^三〕淺草の事實

駒掛堂、^〇中 按ずるに、竹町の渡を昔は花方の渡といへり、これは並樹^{ナミキ}の櫻あるかたへ渡ると

いふ義をとりて、花方の渡と唱しごとく、駒掛堂の方へ渡るといふ義をとりて、駒方の渡と唱

し程に、やがてその堂を駒方堂とも唱へたるにや、^〇中 略

或云、子が説のごときは、駒形堂の古名駒掛堂なりしに、其方へ參る渡といふ義をとりて、駒

方の渡と唱しかば、やがて彼堂の名に負し、竹町の渡を當初花方の渡と唱たるを、並樹の櫻

あるかたへわたるの義とす、みな是推量の説にして、信用しがたし、かゝる例なほありやと